

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 小湊拓也

挿絵 A・L・T

第一章 見参！ コズミックナース

第二章 凌辱鬼田村！ 腐肉にまみれた二人の天使

第三章 白亜の淫獄！ 汚辱の集中治療室

第四章 散華！ 天使の純潔

006

061

112

198

登場人物紹介

Characters



ユキナ・クリストファー

関東メディカルセンター所属の戦闘看護婦。明るく天然気味な性格だが、能力は卓越しており、協調性に欠ける部下二名を巧みに束ねる。コードネームは「セラフ1」。

むらさめ はづき

村雨 葉月

コードネームは「セラフ2」。傲慢&勝ち気でプライドが高い。リーダーであるユキナにライバル意識を燃やしている。

やぎゅう あやの

柳生 彩乃

ユキナの部下で、コードネームは「セラフ3」。口数が少なく、あまり感情を見せない。ユキナに恋心を寄せている。

小さな肉の真珠を健気に守っていた包皮が、途端にヌルッと剥けて縮んでしまう。

「嘘……」

クリトリスが、ぶくつ……と露わになってしまうのを、彩乃は呆然と、まるで夢の中のできごとのように感じていた。周囲よりもやや色濃いピンクの肉粒が、裸にされてひくひくと怯え始める。そこに、いよいよ触手の一つが寄せられる。

「ひいひい………ッッ！」

くりゅつ、と転がされた桃色の真珠に、醜悪な肉塊が虫の動きで群がっていく。陰唇の間におぞましさが満ち、その中で乙女の最も敏感な部分が行き届くと苛められ続けた。

「いやあああああッ！ あっ、ああああッ！ やっ、やめっ……あうっ、ひいひいッ！ ひあああああああッ！」

トロリとした透明な雪が、クリトリスの痙攣と共に飛び散った。田村が分泌する粘液、ではない。彩乃の中から、じゅわっ……と滲み出てきたものだった。

骨盤を包むように広がって内側から女性器を揺らす、得体の知れない波紋。おぞましさとは異質の妙な感覚。ただ肉体を凌辱されるよりも恐るべき事態……それらの正体が今、じわじわと明らかになりつつある。

（私……感じて、いる？ うそ……）

許されざる状態に、彩乃は陥りかけていた。

幼げな小陰唇が無理矢理に広げられて痛々しく垂み、充血した無数の先端部がグチュグチュと粘液を分泌しながら絡み合った。一固まりの、まるで一本のペニスのような形態になりつつ、処女の部分をゆっくりと抉り始める。だがその侵入を導き助けるかの如く、彩乃の中からもトロトロと蜜のような潤いが溢れ始めていた。

牡と牝、双方の粘液が混ざり合ったものが、ペニス状に合体した触手を伝ってポタポタと雑草の上にしたたり落ちる。

無毛の股間でおどましく蠢く凌辱の感触と、己の中でそれとの同調を始めつつある、より醜悪で許し難い快感。それらが彩乃の自我を圧迫する。

(ユキナ先輩……)

そんな中であつて彼女は、一番大切な人の名前にすがりついた。自分は今、あの誰よりも愛しい女性を浅ましく裏切つたのだ。することは一つしかない。

(ごめんなさい……私、幸せでした……)

舌を噛み切ろうとする。が、それを察知したかの如く、

「むっ……」

何本かの触手が、彩乃の口の中に押し入ってきた。舌を、強引に搦め捕る。

田村のもう一種類の性器でもある臓物の群れは、獲物に自殺など許さず、生きた処女的身體を執拗に愉しみ続けた。じんわりと快楽に毒されながら抵抗しようとする活きのよさ

を未だに失わない肢体を、隅々まで責め廻る。

内股で立つたままくねくねと悶え続ける下半身の裏側では、同じように裸に剥かれた臀部が汚辱の艶を帯びながらウニウニと苛められ続けた。胸と同じく小振りで、きゅつと元氣よく引き締まった乙女の尻が、毛細血管を脈打たせた肉塊の群れにしゃぶりつかれ揉みほぐされ、その挑発的な丸みを帯びたヒップラインが凌辱に歪む。そして少しづつ押し広げられる。彩乃の胸にも股間にも、脇腹や太股、唇にもありつけなかった触手たちが、鎌首をもたげ粘液を飛び散らせながらそこに向かった。

「んっ……！ んんんんんっ！」

触手の蠢く喉の奥で、悲鳴をくぐもらせる彩乃。口中を這い回る触手に精一杯、歯を立てるが、噛み切れるものではなかった。その間にも下方の臓物たちは、小さいながらピチピチに鍛え込まれた戦闘看護婦の若い尻に、粘つく湿気を塗りたくり続ける。

「んんーッ！ んっ、んむっ、んんんん！ むぐっ、んむうううっ！」

いやらしく這いずる肉の拘束の中で、彩乃の裸身が痙攣しつつ激しい拒絶反応を示す。

可愛らしい尻の膨らみがさらに大きく広げられた。それに抗って必死に小さく窄まった肛門が、荒々しく暴かれてしまう。

濡れてまとわりつく白衣を脱ぎ捨てるかのように上半身が跳ねて反り返り、くりくりと転がされ続ける乳首をピンッと突き立たせる。前後から辱められる下半身はどちらに逃げ



ることでもできず、ただヒクヒクと激しい痙攣を走らせた。

丸みの縮まった臀部の間に、触手がゆっくりと滑り込んでくる。

「ん……………ッ！」

彩乃は硬直した。

キュッと寄り集まったシワの中心に、ぬるぬるした先端が触れたのだ。小さく円を描くように粘液を擦りつけながら、その閉ざされた恥穴をゆっくり押し広げにかかっている。

「んっぐ！ んんっ！」

やっとありつけた獲物を食べるように、処女の尻の中心にざわざわと触手が集まった。小振りに形の整った双丘の間で、嫌悪感の塊が粘液をしたたらせながら蠢き、必死に可愛らしく閉じた肛門を最初はくすぐり徐々にグリグリと抉り辱める。

「んむっ！ んんんんうううっ、んんん！ んぐう、んんんんんんっっっ！」

自分の身体になにをされているのか、彩乃はわからなくなっていた。発狂しそうなほどの気持ち悪さが全身を執拗に苛む一方で、それと張り合うかのような快感の波が体内でうねり続けてもいる。

そんな形容し難い感覚が、ぬりゅっ……と身体の中に入り込んできた。まずは、前の方からだ。

「ん……………ッッッッッッッ！」

たつぷりと粘液を分泌しつつ絡まり合った臓物の塊が、信じられないほど滑らかに、小陰唇から膣にまで押し入った。痛みよりも、身体の中に異物を詰め込まれる窮屈な感じがまずあった。それが、ゆっくりと膣壁を擦り始める。

(犯……され……つつ！)

身体の中で蠢動する強烈な違和感を、彩乃は必死に拒もうとした。だが破瓜を迎えたばかりの女性器は、今や洪水の勢いで愛液を分泌している。突っ込まれた異形の凌辱者を、明らかに受け入れていた。彩乃の意思を離れてぎゅうつと締めつけを始めた秘肉の中、触手の塊が嬉しそうに脈打ちながら一気に、

ズッ………ニユウツ！

膣の奥深くへと潜り込んだ。腐汁のように汚らしい粘液と、それを上回る両の愛蜜。二種類の淫汁が潤滑油となって、醜悪な牡の肉塊がついに彩乃の処女を完全に奪ったのだ。

「っ！ んんんんんぐっ、むぐうううう、んんんんんむッ！ んんんんんんっ！」

尻でも、同じようなことになっていた。一本、二本と、触手が恥穴へと忍び込んでいく。三本から先は、もう数えることができなかつた。

シワが消え失せるほど伸びきった肛門が、それでもすぐにキュウウツと寄り集まって、おぞましい肉たちに締めつけを加え始める。括約筋の若々しい力に刺激を受けた触手の塊が、彩乃の直腸の中でビチビチと悦び跳ねた。

硬く勃起した男根ではない、ぐにゆぐにゆとした柔らかさが絡み合ったものが、前後から彩乃を犯していた。先輩にさえ触れられたことのなかった奥深くの部分で、それらが激しくうねり蠢きながら膨張していく。膣と腸壁に塗りつけられる粘液の分泌量が、放出と呼べるほどのものになりつつあった。

股間で、尻の中で、暴れていたものが硬直する。処女喪失の激痛と快感、それらが混ざり溶け合ったような感覚が、爆発の予感と共に彩乃の中で高まっていく。融合した感覚がさらなる強烈な快楽へと昇華、その瞬間……。

「んん……………ッッッ！」

ドクッ……………ビュクビュクッ、ドビュウウウウ……………ッ！

なにもかもが、一気に弾けた。ぶちまけられた粘液の洪水が、処女だった身体を隅々まで汚しながら彩乃の中に流れ広がってゆく。

快楽の余波がやがてゆったりと、彼女の意識を混濁させていった。

(ユキナ先輩……………私を……………)

崩れゆく自我の中でただ一人、すがるべき人の名前を呟く。

(殺しに……………来て、ください……………お願いです……………っ)

ブーストバックを噴かして脱出、という手段をようやく思い出した時には、腰の小型コ

ンパネに伸ばそうとした手に触手が巻きついていた。もう片方の腕も同様で、肉質の紐で束縛された両腕が身体の左右でじたばたともがく形になった。

「はっ、離さないよっ！」

地面に押しつけられてギシギシと音をたてるブーストパックと、上からのしかかる赤色の肥満体との間で、葉月の長身が苦しそうに乳房を揺らす。

空しく暴れる長身が突然、抱き起こされた。太い腕を葉月の腰に回したまま、克蘭ケが身を起こしたのだ。密着し向かい合ったまま、地面に座り込む格好だった。どっしりと胡座をかいた田村の膝の上で、葉月の長い両脚が、患者の重たく肥えた下腹部によって押し開かれる。

黒い繊維が僅かに絡みついた太股に、ぬるりとした熱さが擦りつけられた。

「きゃっ……！」

でっぷりとした腹肉の下からそそり立ってきた、異形の男根。大きく傘を広げた肉の茸がドクドクと震えつつ、パンストを剥かれた内股に押し当てられている。

「きっ……汚いものくつつけるなあっ！ 離れないと切り取るわよっ」

「汚いと思うかね？ まあ今はそうだろうが……すぐに、哀願して欲しがるようになる。この汚らしいものをね」

葉月の腰を抱いた田村の左腕は、弛みきつていながらも脂肪の塊とは思えない力を有し

ており、鍛え抜かれた戦闘能力を秘めた看護婦の身体をしつかりと拘束していた。赤くただれた醜い姿と向き合つて座り込んだまま立ち上がることもできず、葉月はただ動けぬ長身を暴れさせる。

力強いくらいに白衣を膨張させた両の乳房が、田村のすぐ目の前でブルンブルンッ、と空気を殴打する。

腰は、赤黒いグローブのように巨大な左手でがっちり固定されて動けぬままに、脚のつけ根までの長さになつてしまつたパンストに包まれた陰阜の盛り上がりをつかず離れずといつた感じに狙う男根からとにかく遠ざかろうと、必死で空しい震えようを見せた。

患者の肥満した腹によつて左右に広げられた両脚、ズタズタの黒い縞模様飾られたその優美な脚線が駄々っ子のようにばたつき続ける。踵の長いブーツが幾度も幾度も、クランケのでっぷりした背中を蹴りつけるが無論まったく効いてはいない。

やや紅潮した美貌にツインテールの髪がまとわりつくほど振り乱しながらも、紫の瞳は眼前の患者にキッと眼差しを叩きつけたまま焦点を微動だにさせない。

そんな気丈な怒りを愉しむように、田村がゆつくりと右手を伸ばした。

分厚く肥えた掌が、まずは脇腹に当てられる。ひくつと一瞬の震えを走らせたボディラインを、ゆつくり這い上つていく。

「やっ、やめなさいよちよつと………ッッ！」

おぞましい愛撫が胸に達した。虫のような醜い五指が、ぶるぶると暴れ続ける白衣の膨らみの片方をムニツと捕まえる。

悲鳴を放とうとしたまま、葉月の唇も舌も喉も硬直してしまふ。変、としか表現しようのない感覚が、左乳房を荒々しく鷺掴みにしているのだ。

大きめのメロンほど豊かに膨らんだ乳肉が、薄桃色の布地もろとも、グローブのような手の中で柔らかく歪み潰れる。

（触られた……患者なんか……っ！）

そんなヒクツと身体を震わせた緊張を、田村は白衣の上から感じ取ったようだ。

「ほう、この反応……初めて、のようだな？ ぐふふふ」

分厚い唇がニタリと歪み、ナメクジのような長い舌が現れる。

「なに……バカなこと……っ！ あうっ！」

左バストにまとわりついた奇妙な感触が少しずつ、生き物のように蠢き始める。太った指が白衣に沈み、むっちり大量に押し出された柔乳がムニムニツと変形を繰り返す。

初めて、という言葉が脳裏に貼りついて離れなかった。これまで、性的なことには欠片ほどの興味も抱かず、ただ患者を狩り続けることだけを人生のすべてとして過ごしてきた。通りすがりに時折、ユキナが彩乃にいたずらをしているのを横目に見るたびに、一体なにが面白いのかと心中で嘲笑ったものだ。

(あれと……おんなじこと、されてる？ あたし……)

生まれて初めて、胸を揉まれている。それを葉月は呆然と実感した。

彩乃の悲鳴が聞こえる。あんなふうに自分も今、気持ちが悪いと感じているのか、それすらも葉月にはわからなかった。

「おやおや……本当に、慣れていないのだな君は。まったくの子供というわけだ」

田村が少しだけ力を強めただけで、金属のボタンがちぎれ飛び白衣がめくれた。

「や……っ」

葉月が悲鳴を辛うじて呑み込んでいる間、まずは優美な鎖骨の窪みと黒いストラップが露わになる。純白の布地は容赦なくはだけられ、二の腕と胴体を束ねてしまう。

黒薔薇を思わせるレース生地ブラジャーが、ぶるんっ、と揺れつつ白衣を押しつけるようにして現れた。

山中の薄暗さの中にあつて、どこかぼんやりと妖しく輝いているかのように艶やかな肌。その白さと鮮やかすぎるコントラストを成す黒い下着に、むっちり実った大量の乳肉が苦しそうなほどギュウギュウに詰め込まれているのだ。

内側からの瑞々しい圧力で今にもちぎれ飛んでしまいそうなブラジャーの膨らみに、田村の大きな指先がゆっくりと押しつけられる。

「こんな大人びたものを身に着けるのは、十年早いのではないかね？」

「！……こっ、このおっ！」

丸く大きな両目が柳眉もろとも吊り上がり、微かに汗の浮いていた美貌が赤く染まる。そんな表情の周りで青いツインテールが生き物のように跳ね躍った。触手と白衣に拘束された両腕は動かず、長い両脚はあられもなく開かれたまま、患者の肥えた胴体の左右でじたばたと空気を蹴るだけだ。

スラリとした線の中に豊かな肉を収めた両の太股が、でっぷり垂れた田村の腹に押し割られた体勢を変えることができず悔しげに悶える。ズタズタのストッキングをこびりつかせた白い内股を、脈動する肉の茸が相変わらず愉しそうにつつき回した。

痙攣する牡の体温の塊が、太股の内側で動き回っている。その生暖かさとは対照的な寒気が葉月の身体をゾクゾクッと駆け上り、囚われの長身を激しくのけ反らせた。

「くっ……このっ！ いっ、いい加減にしないとっ……切り刻んで、ぶちまけるわよっ」
目の前で実に嬉しそうに歪む醜悪な容貌を、葉月は顔を精一杯逸らせつつ目だけで睨みつけた。端正な眉根が微かに寄り、美貌の眉間に切なげなシワを刻む。

「生きたまんま解剖して、ひっ！ きゃああああああっっっ！」

呑み込んだ悲鳴が、つい溢れてしまう。田村の指先が、黒いブラジャーにゆっくりと円を描き始めたのだ。はちきれそうに膨らんだレース生地の頂点、ぷくつと元気に尖った小さな突起を中心にある。

「実に子供らしい意地の張り方だ。身体の方はこんなに……大人だというのになあ」
描かれる円が小さくなっていく。赤黒く膨れた指先が、やがてその突起に触れた。ひくつ、とブラジャーの上からでも見て取れるほど激しく震えた乳首が、じつくりとこねられ始める。

「やあつ！ やつ、やめろ……って、言ってるのよ……おつ」

じわ……と、乳房の先端が下着の内側で熱を持ち始める。子供も生んでいないのに母乳が滲み出てきたような錯覚があった。震える唇から、乱れた吐息と共に溢れる拒絶の言葉。葉月の胸は今、それとは裏腹な反応を示しつつある。

「ふふ、素直ではないか。身体の方はな……おうおう、いやらしい乳をしている。ほれ、こうして下着の上からでも摘めるほど硬くなっているではないか」

「ふざけたことっ……あうっ！ やつ……やあん……」

葉月の吐息が、ますます甘ったるく弾み始める。

黒のブラジャーをツンと尖らせた突起を、田村の人差指と親指が軽く挟み込んでいる。レース生地もろとも摘み、転がす動きがゆつくりと加えられた。熱く勃った乳首の硬さを、優しく揉みほぐすような微弱な責めだ。

「あふっ……！ こっ、こんなの……いや……あんっ……！」

とてつもなく敏感な部分を苛められているのに、不思議と痛みはなかった。嫌悪感、と

も似ているようでどこか違う。とにかく生まれ初めて味わう奇妙な感覚が胸の頂点から広がって、大きなブラジャーの内側にじんわりと満ちていく。

男に触れられたこともなければ、ユキナや彩乃のような女同士の快樂すら知らない身体だった。性的なものをまったく知らない処女の肉体に今、この上なく醜悪な男によつて、未体験の感覚がじわじわと擦り込まれつつある。

(こつ、こんな奴につ……あたし、なに……されてるのよお……こつ)

ふつくらした唇は吐息を漏らしっぱなしで閉じなくなり、心中の呻きが声として出ることはない。葉月はただ、目の前の男を睨み据えた。そのつもりだったが、先程まで瞳に宿っていた激しい敵意が今はしどけなく蕩けかかっている。氣丈に吊り上がった形を辛うじて保った双眸が、しつとりと潤いながら田村を見つめた。

「媚びた目をするではないか。氣持ちがいいのか？」

「そつ、そんなわけ……ない……つ！ ああうッ！」

否定の言葉を嘲笑うように田村の指が、こね回していた乳房の頂を軽く弾く。微かな痛みが乳首の熱い疼きを促進し、葉月の悲鳴を上擦らせた。

「ぐふふふ……子供なら子供らしく、もつと素直になることだ」

一時的に責めを止めた指先が、フロントホックに触れる。不格好に肥満した指がその時、信じられないほど器用な動きをした。

プチ……ッ。

ホックが外れた途端、黒いブラジャーが左右に弾け飛んだ。ぶるるんっ、と解放された乳房が、大きさを増したように見えるほど激しく揺れる。じっとり浮いていた汗の雫が、飛び散った。

衣服の上からさんざん加えられた責めによってか、ほんのりと血色を浮かべ温かいピンク色に染まった乳肌に、田村の眼光がねつとりと注がれる。メロン、いや小型のスイカを思わせる豊満な白い球形が、さすがに自重に耐えかねて少しだけ垂れるが、硬く尖った乳首は勢いよく上を向いていた。

ずっしりとしたバストの先端で五円玉ほどの大きさに広がった乳暈は、ピーナツクリームのような薄い茶色で、その頂点はツンと自己主張をしつつ小刻みにひくついている。

「くううっ……いやよお……ッ」

下着の黒さから解き放たれた裸の胸の豊麗な白さに、粘っこい質量すら感じさせる視線が生き物の如くまとわりつく。葉月はどうか口を閉じて唇を噛むが、その悔しそうな呻きにもどこか甘味が滲んでいた。潤んだ視界のどこかで、田村の手がゆっくりと伸びる。

衣服越しではない直接の感触が、べつとりと左の乳房にまとわりついた。

「きゃうっ！」

醜く肥えた掌が、スイカのような片胸に貼りついていていた。親指と人差指の間で、薄茶色

の乳首がピクピクッと痙攣する。

皮膚のない肉から体液が染み出ているのか、生温い湿気の混ざった感触だった。それが、ゆっくりと蠢き始める。

「ああつ……！ あう……つん……」

裸のバストの重そうな丸みが、克蘭ケの掌の中で柔らかく歪む。野球のグローブ並みに巨大化した手にも収まりきらないほどの乳房が、五指の間からむにと絞り出される。乳房の中に満ちていた奇妙な熱っぽさが執拗にこねられ、それに合わせて葉月の喘ぎも甘ったるく乱れた。

「はあつ、はあ……つん」

患者らの手によって被害者の女性たちがどのような目に遭わされているのか、もちろん知識はある。知識だけだ。

（こ……こんなこと、だったなんてアウッ！）

今まで体験したことのない、ざわつく細波のような……快感、であることをしかし、切なそうに半開きになった唇が吐息混じりに否定する。

「だつ、ダメ……いやだつてばあ……」

「可愛らしく意地を張るではないか、ふっふふふ……そうやって強がれば強がるほど、ほれ身体の方は正直になってゆくわ」

田村の舌が、言葉と共にうねうねと揺らめきながら伸びてくる。

搾り出された肉の頂点で、これ以上ないくらいに硬く尖りヒクヒクと震え続ける乳首。そこに舌先がゆっくりと迫る。

「ヒ……………ッ」

薄い乳暈、肌の白さから薄茶色へのグラデーション部分を、ナマコのような舌が軽くなぞる。唾液を塗りたくられる感触がやがて、ひくつきながら勃ったバストの頂点をいやらしく包み込んだ。

「ひゃううっ……………あはあうううッ！」

甘美な刺激が、葉月の全身をピリッと駆け抜ける。細波が、彼女の中で荒れ始めた。

口から吐き出された内臓の如く脈打ち蠢く舌の先端にくるまれたまま、薄茶色の突起が切なそうに恥ずかしそうに、あるいは嬉しそうに身震いを激しくする。

「やめてっ、やめてやめてえっ！ だめっ、絶対……………いや……………ああんっ、ひいっ！」

ぺろ、くりくりっ、と舐め転がされながら、葉月の乳首はそんな拒絶の悲鳴を無視してなおもピクピクと反応し続けた。鋭い快感が胸の先端で暴れ、じんわりと乳肉を温めていた熱がカッと燃え上がって身体じゅうに拡散していく。汗ばんだ白い肌をほんのり桃色に染めながら、優美な長身が田村の膝の上でくねくねと悩ましげに躍る。

血管を蠢かせながら屹立したペニスは、悶える太股を相変わらずツンツンと軽く辱めな

がらも、少しずつその先の獲物を狙い始めていた。痙攣する肉茸につつかれ擦られて震える両内股の中心、こんもりと隆起した黒いショーツへと、肉の砲口が向けられる。レースの生地とうっすらと透けた恥毛の茂みを渴望して、縦に裂けた牡の先端部がぱっくり開いて透明な雫をトロリとしたらせる。

それに呼応するかのような得体の知れない疼きを、葉月はいつの間にか下腹部に感じていた。下着の中で陰毛がざわめくような、表現しようのない感覚だった。不安や恐怖、に似ているようでどこか異なる。

「身体は待ち焦がれているようだな？ 君の言う、この汚らしいものを」

「ばっ……バカ言ってるじゃ……ないわよおっ……くふウッ！」

苛められる乳首が唾液の飛沫を弾いて震えるたびに、ショーツの中の疼きが鼓動のように高まっていく。大小の陰唇が、もじもじと蠢き始めているのが感じられた。

その奇妙な感覚を、葉月は必死に否定し続ける。

「もうっ……絶対、切り刻んでやるからムゲッ」

精一杯、脅しの言葉を漏らそうとする葉月の唇に、ブチュッとながか押しつけられた。ヒキガエルのように大きく分厚い、田村の口。

「んっ………！」

唾液まみれの口が、葉月のファーストキスを食った。軟体動物のような舌が、綺麗に並

んだ上下の歯をヌルリと押し開けて這い入ってくる。

患者の大口が、ふっくらした処女の唇をモゴモゴと味見しながら舌をうねらせる。生き物を口に突っ込まれたような息苦しさの中、葉月の拒絶の意思は次第に朦朧となっていた。初めての唇を奪われたというショックも、すぐに紛れてしまう。

田村の右手がようやく乳房を解放し、ゆっくり下方へと潜り込んでいく。腰周りにまわりついていたパンストの生地が、まずは引きちぎられた。

(そっ……そんな……っ)

醜くむくんだ患者の手が次にどこを狙うのかは簡単に予想がつく。すぐに、それは当たった。白衣の裾の内側で、なにかの幼虫を思わせる指がショーツを掴む。

葉月の股間で黒いレース生地がずらされ、右脚のつけ根辺りに寄せられてしまう。途端、黒々としたものがモッサリと溢れ出す。

「ほうほう、毛深いのだな？ 見た目だけは大人というわけだ……」

かあつ、と葉月の顔がさらに紅潮する。激怒、ではなく羞恥心によるものだ。本来ならば怒り狂ってこの相手を切り刻むところだが、

(見ないで……よお……っ)

今はそんな弱々しい声を、しゃぶられる口の奥に籠もらせるのがやつとだった。

現れた陰毛は正確には黒ではなく、髪と同じ青色で、それが黒く見えるほど濃く茂って

いるのだ。そんな草むらの真ん中がパツクリと割れ、めくれた牝肉の内側の鮮やかなサーモンピンクが露出している。そのさらに中央では小陰唇がひくつきながらも開閉し、切なそうに吐息を漏らし続ける口と同じような有り様を見せていた。ただし溢れ出しているのは吐息ではない。唾液のようにトロリとした粘性のある水分が、恥毛に囲まれた肉の薄紅色を生々しく潤わせている。

よだれにまみれた口からチロツと舌先が現れた感じに芽吹いたクリトリスも、その濡れた赤色をヒクヒクと震わせ続ける。

つつ、と太股を擦りながら、そこへ熱いものが滑り寄っていった。

「んっ……！ んんううっ！」

悲鳴が、田村の舌にこね回される。

（へ……変なもの当たって、あふうううっ！）

触れてきたのがなんであるのか、葉月の頭が冷静に認識する前に、身体の方が正直すぎる反応をしていた。落ち着きなく小刻みに開いたり合わさったりを繰り返していた小陰唇が、熱く怒張する肉塊の先端に、びちゅつと濡れたような音をたててしゃぶりついたのだ。

「むっ……あうッ、うふあああああっっ！」

太い舌先が引き抜かれ、絶叫が解き放たれる。とろりと伸びていく唾液の糸を未練がましく舐め取ろうとするかのように、葉月の舌が限界まで伸びて宙をさまよった。

下腹部で疼いていた感覚が、いよいよ熱っぽさを増す。それは子宮が溶け出してしまいうようなほどで、融解した生殖器官が膣内を流れ落ちてくるような感じがあった。

ブシュッ……！！

密着し合う亀頭と小陰唇の隙間から、それが噴き出し飛沫となつて散る。田村が先走らせているものよりも、葉月のそのお漏らしの方が圧倒的に量が勝つた。精製された蜜を思わせる綺麗な水滴がキラキラと飛び散り、したたつたそれが雑草を濡らす。それは朝露のようでもある。

凌辱にも快楽にも慣れていない葉月の股間は、男によるたつた一度のノックにあつさりと屈してしまつたのだ。

(はあ……はあ……な、なに……なんなのよオ、これ……)

最初は細波のようだった快感が一気に高まり、岩にぶつかつて砕け散つた。そんな感じがあるが完全に発散したわけではない。一見、風に戻つたようであるが、またいつ大時化しげになるかわからない海原が、葉月の中に広がっている。

「ご、極上のオードブルだ。ぐふふふ……どれ、もう少し味わうとしようか」

田村の右手は、シヨーツをずらしただけで葉月を許したりはしなかった。どっしり胡座あぐらをかいた脚の上でたぶたと揺れている尻を、芋虫のような五指がじつくりとまさぐり始めたのだ。

「やあっ……！ な、なに……するのよ……っ」

歪んだ下着からたっぷりとはみ出た白い尻肉が、五匹の芋虫によってムニムニと揉み潰される。そんな感覚が少しずつ、ヒップの中心へと忍び寄っていく。

快樂の波が再びざわつき始めるのを、葉月はなす術もないまま感じていた。豊かな臀部の間に深々と食い込んだ黒いショーツに、田村の中指がまさに虫の動きで潜り込む。

「ひいうっ！」

くにゅっ、と内臓の入り口がこねられる。執拗だがなかなか一線を越えようとしないう前の快樂に、後ろからの快感がぶつかって骨盤の真ん中で溶け合った。そして脊柱を駆け上り、豊満な長身を田村の抱擁の中でヒクヒクッと激しく躍動させる。赤らみ、ひきつった美貌の周りでツインテールが元気に暴れ躍った。

今やもう一つの口となった陰唇はより貪欲に肉根の頭に吸いついて愛液を搾り出し、柔らかそうに波打つ尻肉の間では少しだけ広がった恥穴が太い指先をキュッと締める。

「うっ、うふうっ、ひくっ！ あはううっ……！」

葉月の中の海が大いに荒れ、たゆたっていた快樂が激しく渦を巻きつつ身体を、左右の青い髪房を、それに声を、甘く弾ませ続けた。

微かに盛り上がって指先にまとわりつく肛門をクニクニとこね回しながら、田村は巨大な左手で戦闘看護婦の細い腰をグイッと掴み寄せた。

どっしり座り込んだ下腹部が、葉月を貫く勢いで突き上げられた。

ズブ……ウウツ！

ウイルスを漲らせた男根が、そのまま一気に葉月の処女を貫通した。ぶつつ、となにかが弾けるような一瞬の激痛と共に、快感が津波となる。

「あ……ああつ、あうううっ！」

「汚いものに、こうして浅ましく悦ばされる気分……どうだね？ ええ？」

「……うふう……ううん……っ」

気持ちいい、と認めるしかなかった。ついさっきまでは極めつけにおぞましく汚らしく見えていたはずのものが、今は生まれて初めて味わう快感の塊となつて下腹部の中に突き立っているのだ。

怪物化した手で葉月の腰を掴み寄せるのと同時に田村は、破瓜を迎えたばかりの肉体を下から抉り続けた。

「さあ言つてみたまえ……汚いのに、なんだ？」

「きつ……き、もち……いい……のオッ……」

大きな機械のように律動する肥満体に抱かれながら、葉月はあらゆるものを激しく揺らしていた。声を、吐息を。青く艶やかなツインテールも、優美な長身も。

スイカのような乳房は田村の眼前に突き上げられつつ、上下だけでなく左右にも悶え揺

れて擦れ合い、ぶつかり合つてタプン、タプッ！ と音を響かせた。

まくられた裾からむつちり現れた尻も黒いシヨーツを食い込ませたまま、下からの杭打ちに合せてぶるぶると暴れ震えている。

揺れる身体の中では、まるで別の生き物のようになった膣が、初めて受け入れた男をくにゆくにゆと締めつけ擦り続ける。

「ほおっ、う、上手いではないか……素質が、あるようだな。ふっふふふ、男を悦ばせる、牝奴隷の素質がなあ」

「はあっ、あううんっ……んっふう、あっ……ああん……っ」

田村の嘲笑そのものの賛辞にも、葉月はもはや反発できずにいた。唾液に濡れ始めた唇からとめどなく漏れる声を、弾ませるだけだ。

彩乃を凌辱しているものと同じ臓物触手が幾本か、いつの間にか葉月にも絡みついていた。優美な長身の暴れようを愉しむように、ヌルヌルとした愛撫を全身に加えてくる。

陰唇の内側にあるものが、膣も子宮も泌尿器官に至るまで一緒くたに溶け合ってしまったかのようだった。坩堝くわぼとなった葉月の下半身の中、ウイルスで凶暴化した肉棒がグチュ、グチュッとひたすらに荒れ狂う。

「とっ、溶けるう、ああんっ！ あっ、あたし、とっ！ とけちやううウウウッ！」

煮えたぎるような快感が激しく掻き回され、今にも沸騰して身体のどこかから迸り出て



しまいそうだ。田村のものをしゃぶり続ける小陰唇から、坩堝の中身がとろとろと際限なく溢れ出す。シヨーツにぐっしよりと染み、黒い布地が吸収しきれなかった分が大量にしたり落ちる。草むらの地面に、湯気が立っていた。

ひたすら犯され続ける身体の中で、暴れていた肉塊が突然、硬直し痙攣する。そして。
「とけ……あ……っ」

ビュッ……。

長い脚が、田村の肥えた胴体をしつかりと挟み込む。

「ああっ……いつ、いつちゃ、うああうっ！ ああっ、ひいあああああッ！」

ドビュッ、ビュクビュクッ！ ビュウウウウウッ！

葉月の体内でどろどろに溶けていたものの中に、それを上回る熱さが凄まじい勢いで流し込まれていった。澄んだ絶叫が、山中に高々と響き渡る。

長身をビクビクと跳ねさせる勢いで注がれ続ける奔流が、葉月の中で熱く溶けたものと混ざり合っていく。とめどない快楽が、波動のように全身に行き渡りつつ暴れた。

「ああああっ！ あっ、あはっ……あうう、うふん……っく、ふあああうっ！」

叫び続ける葉月は、気づいていない。目の前で起こりつつある、田村の変化に。

腰を挿んでいた両手が、見る見るうちに縮んでいく。グローブほどだった大きさが老人ほどの細さになり、そして戦闘看護婦の両腕を縛っていた触手もカサブタのように干から

び、崩れていく。振りほどいて逃げられる体勢ではあるが、葉月の頭にそんな選択肢が浮かぶはずはなかった。目に見える拘束はなくとも、今の彼女は快感という、目に見えない鎖で縛られている。ただひたすら患者の身体の上で、整った長身を上下に揺らすだけだ。

そんな肢体を抱きながら、田村の肥満体そのものも急速に痩せ細り、萎びていった。座り込んだまま即身仏のような状態となりつつある彼の肉体から、犯されている葉月の方がなにか吸い取っているように見える。

「私のすべてを……君たちの中に……」

そんな吹きなど無論聞こえないまま葉月は、目の前で干からびていく克蘭ケの身体を粉碎してしまいかねない激しさで悶え暴れた。

「うっふうッ！ はうんっ、ああっ！ いいっ、いいのお、とつてもイイのおオッ！」

「ふふ……待っているのだよ、生意気な金髪の娘。君もすぐに、このように可愛がつてくれる……この子たちと……一緒になって……な……」

やはり、田村の言っていることは葉月にはわからない。わかるのは今、身体じゅうを駆け巡っている快感の波が、とてつもない高さにまで達しつつあるということだけだ。

「はああっ……いッ……！」

達した、と言うより超えた。葉月のなにもかもが、弾けていく。

「くっ……いく、ああっ！ いッ、いッくうウウっつ！ あああっ、あッ！ あああああ

ああああああつっつ！」

ドブッ……！

田村の最後の一滴が、葉月の中で跳ねた。

両脚の間で、なにかがポロポロと崩れていく。それも、彼女にはもうわからなかった。

赤ん坊のようになった全裸の男が、草むらに倒れている。ユキナは額の汗を拭い、空になったニードルプスターを放り捨てた。

意外に時間を取らされたのは、冷静な戦いができなかつたせいだろう。葉月と彩乃が気がかりだったのは無論だがそれ以上に、頭に血が上りすぎていた。

今、ユキナの視線の先には一人の少女がいる。凌辱から解放され、雑草の上にぼんやりと人形のように座り込んだ半裸身。

ズタズタになった東園寺女学院の制服が、丸い肩からずり落ちる。乳房が露わになるが、隠そうという素振りもない。きよとん、と見開かれた目がこちらを向いてはいるが、見たものを脳がきちんと受け止めているかどうかは怪しい。

そんな眼差しが、ユキナにじっと向けられる。あらゆるものから解放された先程の患者たちと、同じような目だった。

廃人となって転がっている男をユキナはもう一度、睨みつけた。間に合わなかったのだ。

到着した時にはすでに、少女はこの男に犯されていた。

助けることはできなかったが、仇は討てた。それでよしとするしかない。動かなくなつた患者にクルリと金髪を翻して背を向けると、ユキナはもはや仕留めた獲物の方を見ずに少女に歩み寄つた。

近くに屈み込んで目線の高さを合わせ、まずは声をかけてみる。

「こんにちは♪」

「答えはない。もともと童顔だった少女の、惚けてさらに幼さが増してしまつた容貌が、微かに傾いただけである。小鳥を思わせる仕種だつた。」

心神喪失状態にある患者と、どう接するか。マニュアル的なことを一応、看護学校で教えてはくれるが、特に相手が女の子である場合、ユキナなりに身につけた方法がある。

「……消毒、しなくっちゃね」

実行すべく、まずは腰のコンパネに手を触れる。カシユ……という音と共に、背中から重さが失せた。装備解除されたブーストパックが、ずしりと草の上に落ちる。ユキナは身軽になつた細身を、両膝で立つた姿勢のままゆつくりと少女に寄せていった。

目の前にある幼げな美貌の、愛らしく丸みを帯びた頬をそつと撫でてやる。もう片方の手を、少女の肩から背中へと滑らせる。柔らかな長手袋をまとつた優美な五指が、無惨に暴かれた白い肌をいたわるように這う。単に身を寄せ合うよりも、ユキナの方が抱く格好

になつていた。

まだ少し遠慮がちに少女を包む両の細腕に、微かな身じろぎが伝わってくる。が、どこか壊れたままの表情は変化を見せない。

……いや、唇がほんの少しだけ震えたように見える。軽く、ユキナは吸いついていた。いきなり舌を入れるようなことはしない。触れ合った二人の口が、すぐに離れた。柔らかな感触の後味だけが、パールピンクの唇に残る。

なにをされたのか、この少女はまだわかつていない様子だ。呆然とした表情がしかしもう一度、小鳥のように傾いてユキナを見つめる。自分の身になにが起こったのか、それを訝るくらいの感情は少しずつだが蘇ろうとしている。同じように笑顔を傾けながら、ユキナは質問を試してみた。

「どうも、ユキナっていいまあす。あなたのお名前、訊きたいなっ」

「築島……洋子……」

か細く、幼児のようにたどたどしい、だが明らかな言葉だった。

「それじゃあ洋子ちゃん。あなたは今から、とつても素敵な夢を見まあす」

黒髪の緩やかなウェーブを右手で楽しみつつ、ユキナはゆっくりと抱擁の力を強めた。

「……だめ！」

突然、洋子がユキナの腕を振りほどいた。尻餅をついたまま後退りをして、木に身体を

ぶつける。

「私、汚れて……あつ、アグッ」

妙な悲鳴を漏らす口から、鮮血がこぼれる。恐らくは血であろうが、赤くはなかった。やや青みの濃い紫色が、愛らしい唇から毒々しく流れ出しているのだ。

「見ないで……」

少女は木にしがみつくようにして起き上がり、しっかりと立つ前に走り出そうとしていた。そして一歩も進まぬまま、なにかを足に絡ませ転倒してしまふ。

吸盤のない蛸の脚、といった感じの触手だった。それも洋子自身の、脚のつけ根辺りから生えている。一本ではなかった。二本、三本とユキナが数えている間に凄まじい勢いで分裂し増え、少女の下半身はたちどころにそれらの触手で埋め尽くされてしまふ。犯された。即ち感染した、ということだ。

「……洋子ちゃんっ！」

襲うような勢いで、ユキナは彼女に飛びついた。感染の直後なら間に合う、そんな不確かな話を聞いたことがある。それに懸けるしかなかった。

「いやっ！ いやあああああああっ！」

悲鳴に構わず、洋子を抱きすくめながら地面を転がる。

「だっ、だめです離して！ お願い……あたしの、こんな身体……抱いちゃダメ……」

嗚咽を漏らす唇を、ユキナは無言で奪った。これは夢、などと言ってやることもできない。決して覚めることのない悪夢に、洋子は陥ってしまったのかも知れないのだ。

「むっ……だ、めえ……っ、駄目ッ！」

キスを振りきってなおも逃げようとする少女の異形化した下半身に、ユキナは飛びついていった。触手の群れの中から両脚を探し出し、半ば無理矢理に開く。

恥毛の黒い茂みとその中の、腫れ上がった陰唇の割れ目が露わになった。無惨な傷口のようになつたそこから、血と混ざつた汚らしい粘液がドロリと垂れる。

考えることなく、ユキナはそこに顔を寄せていった。充血し膨れ上がり、なおかつドロドロに汚れて、虫の死骸でも貼りついたようになって部分に、可憐なパールピンクの唇が近づいていく。

触れ、そして吸った。

ピチャ……チュル……ッ。

「あっ………あ！」

口戯に合わせるように、洋子の全身がビクッと跳ねた。血と粘液の汚れが、ユキナの口の周りにトプツと飛び散り美貌を濡らす。構わず彼女は、まるで仔犬がミルクを舐めるように、優しく舌を使い続けた。

「あうっ、き、汚い……のにい………ひっ！ あはうっ、あああああああっっ！」

トロ……………ッ。

汚れを洗い流すように、透明な蜜が溢れ出した。陰毛でも止められないほどの量が、失禁のような勢いで逆る。

触手が一本また一本と、カサブタのように干からび崩れていった。そんなものは最初からなかったかのように洋子の下半身が、少女らしく瑞々しい両脚の形を取り戻す。

「あっ……………はあ、はあっ……………うんっ……………うえええ……………っ」

泣きじゃくる少女の身体をユキナは、

「もう、大丈夫だから……………」

それ以上はなにも言わず、そっと抱き締めた。

彩乃と葉月のことは、一時的に頭から追い払った。戦うにせよ逃げるにせよ、彼女たちは自分でなんとかできるはずなのだ。

ぴちやつ……と、乳首から唾液の雫が飛んだ。

「あふうっ！」

電流のような感覚が、十九歳の半裸身を走り抜けた。濡れて固まった金髪が、バサリと空中を舞う。

雨の日のミミズのように跳ね躍る舌の上で、ピンク色の可愛らしい突起がクリクリと転がり続けた。滑りと生暖かさを帯びた刺激が胸の先端から全身を駆け回り、唇に及んだ。愛らしいパールピンクが、切なそうに震える。

「はあっ、いっ！ いやああっ……やめてよお……」

拒絶の声に、やるせない甘味が滲んでいく。

「お、おっぱいの調子が変わすねえ患者さん」

克蘭ケの言葉と共に躍る舌先が、なおも執拗にユキナの乳首を苛める。

まとりつくと舌と五指を振り払ってしまいかねない激しさで、Cカップの双丘が暴れ揺れる。その頂点で可憐に尖った乳頭部がレロレロと辱められながら身震いし、塗りたくられる唾液の飛沫を弾いた。あるいは指先に摘まれたまま、痛そうに熱そうに痙攣し続ける。痛み、ではない。気持ち悪さやおぞましきといったオブラートもすでに破れ、溢れ出した劇薬のような感覚がユキナの胸から全身に広がり走り回る。拒絶の殻を突き破り流れ出したそれを、快感、と認めてしまうことに、僅かながら残った理性が必死の抵抗を続けた。

「ふへ、き、気持ちいいんだろお？」

「だっ、誰がっ！ こんな……あんたたちが、かわいそうだから、治してあげなきゃいけないからあ……させてあげてるだけだもんっ！」

「本当に、そうかな？」

田村の声。肉蛇の頭が、ぷりつと張り出した臀部の間をなぞり這い上る。きつく寄り集まったショーツの真ん中の微かな凹みを、血管の浮き出た亀頭部がやや強めにノックした。濡れそぼった下着がクチュツと鳴り、桃のような両尻肉の間にその音が籠もる。実体のない生き物の蠢動、そんな感覚がぞわぞわつとユキナの肛門から脊髄へと流れ入った。

「ひゃふあつ！ ……むぶっ」

醜く膨れ上がった肉根が、悲鳴を塞ぐ。とろとろに汚れた唇の内側で、勃起した先端が愛らしく並んだ前歯をつついた。

「んむ……ふああ……っ」

ペニスで軽く蓋をされた口の中で舌先がせわしなく動き、とぶとぶと注ぎ込まれる熱いものを吸い続けた。

「なんで、そんなに上手いんだよお……」

蜘蛛型クランケが、腰を揺らしながら呻く。

「僕たちがかわいそうなんて、嘘ついてんじゃないよ。本当に美味そうに、僕の汚いモノ

しゃぶっちゃってさあ……本当はあんた自身、欲しくて欲しくてたまらないんでしょ」

「むっ……そ、そんなことないっ……そんなこと、あんっ！」

口を塞いでいたものを吐き出し、辛うじて言葉を漏らすユキナ。懸命に横を向こうとする美貌を、眼前の男根がピンタの形に軽く殴打した。

「ひどいよ、そんなにイヤらしいなんて。白衣の天使だと思ってたのに……ほんとに天使だって、ずっと思ってたのに……あああ、お前どけえ！」

無我夢中でユキナの乳房を貪るグレイ型クランクの頭を、幾つかの手がガッチリと掴む。そして物のように放り捨てた。頭でっかちの小柄な身体が、悲鳴を垂れ流し宙を舞う。

蜘蛛型に巨大化した身体が、ユキナの目の前で屈み込む。一時的に解放されたバストに、今度は四つの手が覆い被さった。

「やっ……な、なに……の？」

揉まれたり舐められたりといった責めより、もっと恥ずかしいことをされる。その予感がユキナの声をはきつらせた。

「看護婦さんのおっぱい、欲しかったんだ……ずっと……」

整った形を無理矢理に押し広げられた両乳房の間に、肥大した肉棒がベチッと叩きつけられる。びんびんに乳首を勃たせた裸のバストが、食らいつくようにそれを挟み込んだ。

「うっ……た、たままない張りだ。これをするためにあるような、いやらしい乳……許せ

ないっ」

若い弾力がみっちり詰まった双丘に挟まれ、赤黒い肉塊がびくつと嬉しげに跳ねる。その先端からピュッと流れ出した男の液体が、周囲の乳房に降り注ぐ。

瑞々しい肉の圧迫の中、ペニスガムクツと一回り近く膨れ上がるのを、ユキナは呆然と見下ろした。なにが起こっているのか把握しきれずにいる彼女とは裏腹に両乳房が、間でパンパンに張力を高ぶらせる男根を、対抗するかのようにさらに強く挟み込む。四本の手でぐいぐいと中央に寄せられているせいでもあるだろうが、ユキナの乳房そのものも、男の勃起に合わせてみっちり張りつつあった。滑り気のある光沢が、艶やかさを増す。

どこか淫靡な活力を宿した戦闘看護婦の乳房を、四つの手が揉みほぐしにかかった。拒絶の殻から溢れ出し、ユキナの胸を母乳のように満たしている快感が、二十本もの指によって一斉にこねられる。

「あっ……ああっ！ あううう、ふああああっっ！」

勢いよく勃った乳首から本当にミルクが噴き出してしまったかのような感覚が、ユキナを襲った。

一本一本が異なる動きをして責めを加えてくる指の群れによって、形よく整っていたユキナの美乳がムニ、ムニツと複雑な形に歪んでいった。男の体液を塗り広げられ、ますます艶やかに濡れる柔肉。その中から触角のように突き出し痙攣する乳首を、蜘蛛型クラン

ケはやはり故意に避けながら、いくら揉んでも一向に張りを失わない裸のバストをひたすら己の一物に、左右から押しつけた。

そうしながら、上下に這いずらせる。ゆっくりと、次第に速く。

ずる……ずりゆつ。

激しく変形し続ける両乳の間で、男の肉塊が少しずつ粘液を噴きながら溺れ続ける。うっかり陸上に跳ね上がってしまった魚にも似たそれをギユウッと押し包みながら、ユキナの乳房がなおも柔らかくこね潰される。揺れる母乳のような快感が、ずにゆずにゆと音をたてて肉の谷間を往復する牡の摩擦熱によって今や沸騰寸前だった。

(あ……熱くて、ぬるぬるって……はあうっ！ お、おっばい、ほんとに変だよっ！)
うっとり酔い始めたユキナの頭の上から、患者たちの声が降り注ぐ。

「お手々がお留守だよお、看護婦さん。もっと強くしごいてくれないと、僕たちの病氣治らないよおお」

(え……あ、そっか。あたし……この患者さんたち、治してあげなきゃ……いけないんだっけ……)

目的であるはずのことを、蕩けかけた脳がどうにか思い出しかけたその時。二十本の指の幾つかが、ユキナの乳首を摘んだ。

「ひっ……きゃっ！ きゃあああああううっ！」



ミルクのような快樂の波が一気に沸騰し、彼女の絶叫を高々と弾ませる。胸への凌辱に酔いしれるあまり奉仕がおぞなりになりかけていた戦闘看護婦の両手に、スイッチでも入れられたかのように活力が蘇った。蛇を、ナメクジを、掴み潰さんばかりに握り締め、長手袋から白い飛沫を飛ばしながらしごきたてる。

そろそろ言語能力が壊れ始めたかと思わせるような叫びと共に、左右のクランケが歡喜の震えを手袋の上から伝えてくる。それが、ユキナの細腕の動きを促進した。鍛え抜かれた瑞々しい腕力と握力が、患者たちの劣情を刺激するためだけに今、躍動しているのだ。

「ひっ、ひゃう、ひゃふうう……あううん……っ」

患者に快感を与えるだけでなく、ユキナ自身も、男たちの感触を貪っていた。手で、そして胸で。乳を剥き出しにした上半身を自ら揺らし、両バストで挟み込んだ肉塊にずりゆずりゆつと激しい摩擦を加えている。その往復と共に、ぬるぬるした飛沫が谷間から飛び散った。

「はあはあ、ひどいよ……いやらしすぎるよ、看護婦さあん……」

蜘蛛型クランケもひたすらユキナの胸を犯しながら、自分をすっかりくわえ込んでいる双丘を四本の手で苛め続けた。うち二つの掌で乳肉を揉み垂め、その頂でヒクヒク震える桃色の突起を別の二つの手でくりくりつと摘みこねる。

「きゃはあああうんっ！」

鋭い快感がいつまでも蒸発することなく沸騰し、ユキナの全身に絶え間なく震えを走らせる。濡れ固まっていた金髪が跳ね上がり、バラけた。

彼女自身の汗とその他諸々の男の粘液にまみれながら、ユキナの両乳はムニムニと蠢き、谷間を這いずる男根に密着し続けた。

「おいおい、奉仕をしている君がそんなに愉しんだらまずかろう？」

そんな笑いと共に田村に小突き回される尻、それに両太股。ぬらぬらと濡れた光沢にまみれた美肉に囲まれたショーツの膨らみが、クチュクチュ……と微かな音をたてている。胸を襲う凶暴な快感の余波が、股間に及んでいた。食い込んだ下着を実にきつそうに貼りつけた恥丘。他の部分への度重なる責めによって高まったユキナの愛欲そのものを濡れた布地に包み込んだかのように、舟底の形を切なげに蠢かせている。

そこへ田村の肉根が、ヒップラインをぬるつと滑りながら突っ込んでいく。

グッ……チュウウッ！

「あひっ……いっ！ ひいひいひいッ！」

胸から下半身へと押し寄せつつあった快感の波が逆方向から揺り返され、ユキナの絶叫を弾けさせた。

「ひいっ、いっ、いやあ……んッ！ んふあああ……」

ウイルスで変質した男性器によって四カ所を責め立てられ、狂ったように金髪を躍らせ

身を跳ねさせるユキナ。その痴態に、別の気配がゆらりと群がっていく。

「ふほおおお……も、もう我慢できん……」

「俺、俺が先！」

欲望を完全復活させた三体のクランケだった。

「はぁ、ふぁ……ぐむッ！」

パールピンクの唇を真っ先に襲ったのは、ゾンビ型クランケだ。腐った手で金髪を鷲掴みにして、幼げな十九歳の美貌に己の下半身をねじ込んでいく。患者さんを治さなきゃ、という自己弁護が浮かぶよりも早く、ユキナは舌を使い始めていた。狭い口内を満たす肉芽の形を確かめるようにネットリと舐めつつ、鉛玉をしゃぶる感じに口全体で吸引を加えていく。自分がどれだけ恥ずかしいことをしているのか、理性がそれを判断する前に、ユキナの口は牡の味を求めていた。

とろとろと少量ずつ喉を潤していた粘液の感触が、すぐに爆発的に濃厚になり、迸る。最初の時は圧倒的な不味さしか感じられなかった流動物が、一気に喉に流れ込んだ。

「んぐっ！……んっ……く」

振り返った細首を忙しげに震わせながら、ユキナはそれをあらかた飲み干していた。二、三滴が、引き伸ばされた唇と押し入った肉塊との隙間から溢れ飛び散ったただけだ。

体内に流れ込んだものが即座に快楽の源に変換され、敏感さの高まりを嵐の速度で促し

続ける。両手から、口、胸、それに股間から、快感の荒波が寄せては返し、行き場を渴望してユキナの全身を駆け巡る。

ブシッ……ブシユッ！

田村の亀頭にこね回される股間の肉が、ショーツと溶け合ったようになりながら、布地の隙間から少しずつ牝の飛沫を噴出させる。喘ぐように震える尻肉をさらに濡らし太股を伝う性の粘液、その成分は今や大半が、田村の先走り汁ではなくユキナの愛液だった。

「ぶええっ……んむっぶ！」

萎れ始めた肉根を糸引きながら吐き出すパールピンクの唇に、しかし息つく暇もなく、一回り太いものが押し入っていく。よろめくゾンビの身体を押しつけて突っ込んだ象型クランケ。その巨大な生臭さの塊が歯をこじ開けるようにして、呼吸すら難しくなるほど口いっぱいに広がった瞬間、

（あ……そうだ、コレ吸って……出させてあげなきゃ……）

ユキナは目的を思い出した。すでに動き始めている舌を、暴れる海綿体にレロッと絡め、喉を突き潰す勢いで往復する亀頭部に口全体をきゅうつと窄めて粘膜を密着させる。

「ンッ……モゴッ……」

歯を使わずに咀嚼する、そんな感じに蠢く口内で象型クランケはウイルス入りのペニスを嬉しそうに暴れさせた。

「おつ、おとお！ ほ、ホントはすげえ上手じゃねえかよオ！」

（看護婦の、お仕事だもんっ……お仕事な、だけなんだからあ……っ）

陶然と弛んでいた美貌に、僅かながら悔しげな表情が蘇る。

それを塗り潰すように、別の男根がユキナの頬をベチッと叩いた。

「んむううっ！」

「ほれ、綺麗になったのう看護婦さんや！」

驚愕にひきつった彼女の顔を、ヒヒ型患者が笑いながら己のペニスで擦り回している。

ぎゅっと閉じてしまった目蓋から鼻梁の綺麗な線をなぞり、大型の男根をくわえてモゴモゴと震える頬に執拗なノックを加える。その先端からピュッ、と軽く噴き出した飛沫が、パネルアイをまた汚した。

物欲しげな惚けた感じと、悔しげな気丈さとが溶け合った複雑な表情、それを覆うゼリ―状のパックが削ぎ落とされ、ほんのり色づいた乙女の表情が鮮明となった。老人が言った通り、精液から養分を吸収したかのように妖しく色艶を増した頬の肌。ふるぶると張りを高めた顔のどこか幼い丸みを、若返ったペニスが愛でるようにヌルヌルと撫で回す。そうしながら、新たな粘液をユキナに噴きつける。

悔しげな表情を少しずつ溶けさせながら彼女は、両手の中でぐねぐね暴れながら白濁したものを嘔吐し続ける蛇とナメクジにも、可愛がるような握りしごきを加えていった。

「それだけ浴びてもまだ足りないのかね、君は」

田村の嘲りに、吹っ飛びかけた理性が辛うじて反応した。

（んむっ……か、患者さんたち……助けてあげてる、ただだもんっ……）

封じられた呻きと共にペロペロと蠢く舌尖が、象型患者の男根をねぶり回す。小さな口の中で唾液と粘液が混ざり合い、愛らしい舌もろともかき回された。

（な……治して、あげなきや……あ……あうううっ！）

嘘はいけないといった感じに田村のペニスがグリッと、ショーツの上から抉り込みをかけてきた。尻と太股の間で快感がこね回され、液体となつて、ねじれた純白の布地から凄まじい勢いで漏れ出ていく。

絶叫の勢いで、大型のペニスがパールピンクの唇からこぼれ出た。

「あうっふうううっ！ あっ、あひっ！ ひああああううっムウッグ！」

象型クランケの肉根は容赦なく、さらなる奉仕を求めて、処女の唇を再びずぬるつと貫いた。舌だけでなく頬の内側もそれに絡みつかせるユキナ。

封じられた絶叫を代弁するかのよう、肢体が跳ねて振り返った。ピンク色のアメーバのようになつた白衣から押し出された乳房を、蜘蛛型クランケがなおも採み犯す。

顔、口、胸、両手それに股間……ユキナのあらゆる部分を使って、患者たちがひたすらに快感を貪っている。己の肉体が、ただ牡を満足させるためだけの道具として使われてい

るといふ感覚が、ユキナの中で行き場をなくしている快楽の塊をさらに強く揺さぶった。

(あたし今、患者さんたちの……おっ、オモチャ……?)

ドブツ……!

「んむう……つぶ……つぶ……」

突然、息が詰まった。胸の方から嘔き上がったものが鼻孔を満たし、少しだけ喉の奥に流れ込む。そこへ、象型患者が分泌していたものがトクトクと合流していった。

呼吸が完全に塞がってしまふと同時に、ユキナの中で激しく高まり渦巻いていた快感が最終的な行き場に到達しつつかあった。田村の肉根とぐしよ濡れのシヨーツとでびつたり蓋をされた股間から、愛液の潮が一層激しく飛び散り始める。

ブツ……シユウウウ!

(やだっ! そ、そんな……いやっ! いやあん……あつ……)

「ん……! んぐうっ、ンンッ……んむううううっ!」

爆発寸前の快楽がユキナの絶叫を、くぐもらせたまま進らせる。その叫びと共に舌が、粘膜が、唇が、それぞれ独立した生き物のように一斉に蠢動し、口内のペニスにまとわりつく。

「おっ、おうっ、美味いか? 美味いんだろ看護婦さんよオ、これがアンタに踏みまじられた男の純情だああっ!」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>